

慶応義塾
出身
明治期西洋文学翻訳者略伝

本略伝には原則として慶応義塾の『入社帳』に記載のある者のみを掲げた。『入社帳』に名前があるが翻訳者と同一人かどうか確定できないものには名前の下に*印を付した。生没年月日の後の出身地と身分は主として『入社帳』によった。なお、翻訳文学関係の出版者の経歴も一部含めた。

赤坂亀次郎（あかさか かめじろう）一八五八（安政5）

年5月生れ。磐前県平民。

明治9年5月入学、11年12月卒業。横浜丸家商社社員、

東京丸善本店出版部支配人等を歴任。のち集成社（神田

区小川町）を創立し、菅了法訳『西洋古事 神仙叢話』（グリム

著、明治20年）、渡辺治訳『鏡花水月』（シェイクスピア著、

明治21年）等を出版する。その後代議士に当選。森田思

軒は彼の「三等」先輩（明治10年1月「学業勤惰表」参照）。

伊沢信三郎（いざわ しんざぶろう）一八五六（安政3）

年7月—一九二五（大正14）年8月。長野県士族。

明治13年入学。入学のときの「証人」は、彼の翻訳書『経世指針

鉄烈奇談』（フェヌロン著、明治16年）の校閲者兼出版人の森重遠（白梅書屋）。「楽石」伊沢修二の弟で、貴族院議員多喜男（18年1月、慶応義塾入学）の兄。はじめ東京外国語学校でフランス語を学んだのち、大学予備門や他の私立学校で英語を勉強する。明治16年7月、築地の専修学校の経済科を卒業、日本銀行に就職する。17年2月、横浜正金銀行に移り、22年までフランスのリヨンに滞在。そこで学んだ織物の技術をもとに、京都の西陣に事業を起す。大正14年、京都にて没。

「参考」柳田泉『鉄烈奇談』訳者 伊沢信三郎伝『明治初期翻訳文学の研究』（春秋社、一九六一年）

石川安次郎（いしかわ やすじろう）一八七二（明治5）

年8月—一九二五（大正14）年11月。号半山、呑海

等。岡山県士族。

明治22年10月入学。入学のときの「証人」は遅塚金太郎（麗水）。慶応義塾を卒業後『庚寅新誌』の記者となる。

同誌には日本で最初の「米国文学史」が「石川泰山」の名前で連載（38号—63号）されるが、半山と同一人か否か不詳。のち『毎日新聞』『郵便報知新聞』『万朝報』などの編集長や主筆を歴任。大正13年、衆議院議員に当選。

明治20年代の初めには、同じ慶応義塾出身の磯辺弥一郎

が率いる国民英学会に学んだこともある。

磯辺弥一郎（いそべ やいちろう）一八六一（文久一）年

2月—一九三一（昭和6）年4月。大分県豊後の生れ、士族。

明治9年2月から12年12月まで慶応義塾に在籍する一方、岡千仞の塾などで漢学を修める。21年2月、F・W・イーストレーキとともに東京神田に国民英学会を設立、以後亡くなる昭和6年まで同校の経営者・校長として民間の英語教育に力を尽した。磯辺の存命中に国民英学会に学んだ生徒の数は、無慮七、八万人に達し、なかには二葉亭四迷、幸徳秋水、蒲原有明等の著名人も多数含まれる。その教壇に立った教員も、古くは斎藤秀三郎、高橋五郎、井上十吉、夏目漱石にはじまって、昭和初期の中野好夫、朱牟田夏雄にいたるまで明治・大正・昭和期の著名英語学者・英文学者が名を連ねる。出版人としての功績も見ることが多く、彼が30年間にわたって主宰した『中外英字新聞』は日本の英語雑誌や英語教育の質の向上に大きく貢献した。とりわけ外国文学との関連で注目されるのは、明治20年代に国民英学会から発行された『人肉質入敷判法庭之場講義録』（24年）と『英文学講義録』全7冊（25—27年）の2点で、これらの講義録は日本で最初の

西洋文学関係の講義録であったばかりか、シェイクスピアやバイロン、ポーなどの翻訳・紹介文献としても、最も早い例の一つとして注目される。磯辺の名は、慶応義塾出身の文化人としてはいま一つ知られていないが、明治前半における英学的重要性、なかでも慶応義塾がその先駆けをなす学校であったことを考慮すれば、同校の学統を近代英語教育へと引き継ぐ重要なかけ橋となった磯辺の功績は再評価がなされてしかるべきだろう。

〔参考〕川戸道昭・榊原貴教『磯辺弥一郎と「中外英字新聞」』（ナダ書房、一九九五年）

板倉興太郎（いたくら こうたろう）一八七三（明治6）

年10月、備後に生れる。平民。

明治21年入学。卒業後は鉱山業、移民会社、株式取引等、実業方面に従事する。父は宿屋を営んでいたが、板倉家は文学に造詣の深い家系であったと、柳田泉の『明治初期翻訳文学の研究』は伝えている。訳書としては、『シェイクスピアの『コリオレーナス』の翻訳』、自由の管『傑一世鏡』（明治21年）が知られるが、同書を訳したのは板倉が慶応義塾に在学中のことであった。その割りには、シェイクスピアの原書をもとにした本格的な翻訳で、彼特有のこなれた台詞まわしは坪内逍遙の翻訳などと比べ

てもおもしろい比較が可能である。板倉にはこれ以外に
一、二翻訳書があったというが、詳しいことは知られて
いない。

〔参考〕柳田泉「板倉興太郎伝」『明治初期翻訳文学の研究』(春秋社、一九六一年)

板倉卓造(いたくら たくぞう)一八七九(明治12)年12月

—一九六三(昭和38)年12月。広島県生れ。

明治28年9月入学、36年4月大学部政治科卒業。のち大
学部教員となつて、昭和3年から7年まで法学部長。時
事新報社社長、貴族院勅選議員、産経新聞社取締役など
を歴任。外国文学との関連では、慶応義塾に在学中の明
治33年10月から11月にわたつて『慶応義塾学報』に掲載
した「カンタベリー物語の梗概」が注目される。これは、
日本におけるジェフリー・チョーサーの作品の最も早い
紹介例の一つとして珍重されるもの。ちなみに、この『慶
応義塾学報』という雑誌であるが、チョーサーの紹介以
外にも、コナン・ドイルやモーパッサンなど数多くの翻
訳作品が訳載され、本邦に西洋文学を移植する上での重
要な窓口となつていた。『民間雑誌』や『庚寅新誌』、『時
事新報』等々、慶応系の新聞・雑誌が西洋文学の紹介史
上果たした役割を実証する際に欠かせない文献の一つ。

井上貫一* (いのうえ かんいち)一八六二(文久2)?
年。山口県士族。

明治8年1月入学。生年は『入社帳』の「年齢」欄に「十
二年五月」と記載されていることから逆算したものだ。こ
の人物を本「略伝」に取り上げた理由は、明治29年に刊
行された『西洋仙郷奇談』(東陽堂)の翻訳者・井上寛一
と同一人の可能性が考えられるためである。『西洋仙郷
奇談』は「青髭」「眠れる森の美女」「シンデレラ」等の
有名な西洋童話十二篇を収録したものだが、この分野の
翻訳の先鞭をつけたのが菅了法や呉文聡、渋江保等、慶
応義塾出身の文筆家・知識人が多かったことや、同書の
翻訳が「矢野龍溪補修」となっていることを考慮にいれ
ると、井上寛一なる人物が慶応義塾出身者、もしくはそ
の周辺にいた人物であった可能性が高い。慶応義塾の『入
社帳』には井上寛一の名前は見当たらないが、「慶応義塾
学業勤惰表」を調べると、標記の井上貫一の名前が「井
上寛一」と記載されているもの(明治10年1月)が出て
くる。その同級生には矢野文雄の弟の真雄がいたことな
どから、これを『西洋仙郷奇談』の翻訳者と結びつけて
ここに取り上げたという次第。たとえ同一人物ではなか
つたにせよ、本書には「矢野龍溪補修」とあり、慶応義

塾出身の作家との関連で取り上げなければならぬ書物であることに変わりはない。事実の解明は今後の研究に待ちたい。

井上十吉（いのうえ じゅうきち）一八六二（文久2）年10

月—一九二九（昭和4）年4月。徳島生れ、士族。

明治4年12月、9歳で慶応義塾に入学。入学時の姓は林姓。明治6年から16年までイギリスに留学、鉱山学を学ぶ。明治19年から26年まで第一高等中学校教員。その後外務省翻訳官。国民英学会、早稲田、学習院、高等師範学校などでも英語を教える。著書に『英語学講義案』（明治30年）、『忠臣蔵』の英訳（明治43年）等。なかでも『井上英和大辞典』（大正4年）、『井上和英大辞典』（大正10年）等の英語辞書は広く一般に用いられた。外国文学との関係で注目されるのは、明治31年に刊行された『英名家散文注釈』（成美堂）で、そこに掲げられたコナン・ドイルの略伝と「まだらのひも」の原文（注釈付き）は、ドイルの伝記と作品の最も早い紹介例の一つ。他に英文学関係の注釈文献として『英名家詩歌注釈』（成美堂、明治31年）がある。

「参考」 「井上十吉」 『近代文学研究叢書』30（昭和女子大光葉会、一九六九年）

井上真雄*（いのうえ まさお）一八六七（慶応三）年9

月。千葉県士族。

明治18年9月入学。『記留物』かたみ（三友舎、明治24年）の訳者、

井上真雄（笠園）と同一人物か。要確認。

巖谷立太郎（いわや たつたろう）一八五七（安政4）年

1月—一八九一（明治24）年1月。近江水口出身。

明治3年4月慶応義塾入学。大学南校を卒業し、明治10年ドイツ留学。明治18年帝国大学工科大学教授。有名な巖谷小波の実兄で、明治13年、ドイツの留学先から小波にフランス・オットーのメルヘン集の原書を送り、その一部が後に小波の手で『鬼車』（明治22年）として翻訳・刊行された。

「参考」 桑原三郎 「三田の児童文学」 『三田の文人』（丸善、一九九〇年）

内田弥八（うちだ やはち）一八六二（文久2）年1月—

一八九一（明治24）年1月。徳島県平民。

明治16年1月入学、20年4月正科卒業。訳書に、ブラゼー『婦人地球周遊記』（19年6月）やスウィフト政治小説『小人国発見録』（21年2月）等がある。前者は慶応在学中の

出版で、奥付けの住所は「芝区三田二ノ二 慶応義塾寄留」とある。後者の『小人国発見録』は同じ慶応義塾出身の島尾岩太郎との共訳。島尾は内田と同じ徳島県三好郡の出身で、慶応義塾に入学する際の「証人」を内田が引き受けている。内田がこの世を去るのは慶応義塾を卒業して三年もたたぬ明治24年1月のことであったが、その短命を惜しんで福沢諭吉が碑文を認めている。

「参考」丸山信編著『福沢諭吉とその門下書誌』（慶応通信、一九七〇年）

占部百太郎（うらべ ひやくたろう）一八六九（明治2）

年6月—一九四五（昭和20）年3月。福岡県遠賀郡出身。

明治23年6月入学、26年4月正科卒業、28年12月大学部文学科卒業。『慶応義塾学報』編集主任、大学部文学科教授（明治45年—昭和14年）、大学部政治科教授（大正3年—昭和15年）等を歴任。明治36年発行の『慶応義塾便覧』（『慶応義塾学報』号外）の編集人。訳書に、ハマートンの『ヒューマン・インターコース』を翻訳した『人間社会』（開拓社、明治31年）等がある。

奥村信太郎（おくむら しんたろう）一八七五（明治8）

年10月—一九五一（昭和26）年3月。東京芝区高輪出身。号、不染。

明治21年1月入学、27年4月正科卒業、29年12月大学部文学科卒業。博文館編集局勤務を経て、明治36年4月に大阪毎日新聞社に入社。以来同社の要職を歴任。昭和11年12月から同社社長。外国文学関係の編著に、博文館編集局勤務時代の『通俗文学汎論』（博文館、明治31年）がある（鼈頭に「英国文学史」一四〇頁を付す）。

小栗貞雄（おぐり さだお）一八六一（文久1）年11月—

一九三五（昭和10）年3月。大分県出身、士族。旧姓矢野。矢野文雄の実弟。

明治8年1月入学。10年1月の「勤惰表」によれば、「童子科」の同じクラスに福沢捨次郎、福沢市太郎がおり、同じ学期の本科の「第一等」には森田文蔵（思軒）、同じく本科「第五等ノ一」には加藤政之助、犬養毅らがいた。大学予備門にも学ぶが中退。明治19年、『郵便報知新聞』記者、明治31年、代議士当選。翻訳作品としては、ルサージュの『ジル・ブラス』の中の一節「フェイタル・マリッジ」を訳した「志々利譚」（『郵便報知新聞』、明治19年）が知られる。のちに『色は空』と改題し出版された。柳田泉の『明治初期翻訳文学の研究』によると、菊亭香水

(佐藤蔵太郎)がシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の翻案〔奇聞 欧州〕「花月情話」を『函右日報』(明治17年)に連載した際に、英語の知識のない菊亭香水に物語の内容を話して聞かせたのは彼と昵懇の小栗貞雄であったという。

尾崎行雄(おざき ゆきお)一八五八(安政5)年11月—一九五四(昭和29)年10月。高知県出身、士族。号、学堂ほか。

明治7年5月入学。のちに工学寮に転校したが、中退。『民間雑誌』の編集(明治10年)に携わったあと、『新潟新聞』の主筆、『郵便報知新聞』記者等を歴任。明治23年、第一回総選挙当選。以来、代議士当選連続24回。明治36年から大正1年まで東京市長。のち名誉衆議院議員。外国文学との関連では、イギリスの政治家デズレリーの伝記を小説風につづった『経世偉勲』(集成社、明治19年)とマックス・オーレルの『ジョンブルとその島国』の翻訳〔許隠 発秘〕『一読三嘆』(弟の尾崎行隆と共訳。明治20年)がある。

尾崎行隆(おざき ゆきたか)一八六三(文久3)?年生。高知県出身、士族。尾崎行雄の実弟。

明治7年5月入学。兄の行雄と入学年月日、「証人」とも同じ。明治17、18年頃、『郵便報知新聞』の記者。翻訳作品としては、行雄と共訳した『〔許隠 発秘〕一読三嘆』(金港堂、明治20年)が知られる。

角田勤一郎(かくた きんいちろう)一八六九(明治2)年9月—一九一六(大正5)年3月。静岡県富士郡大宮出身。号、浩々歌客。文芸評論家。

明治19年12月入学。「証人」は中村秋香。24年、大学部文学科中退。郷里で私塾を開いたのち、30年『国民新聞』に入社。32年から『大阪朝日新聞』記者。38年『大阪毎日新聞』に転じ、さらに『東京日日新聞』に移って、学芸部長在任中に没。大阪時代には雑誌『小天地』にも関係した。著書に、『出門一笑』(バイロンとシェレー)「社会の高尚と文学」所載、明治34年)等。訳書に、シヨールペンハウアーの『恋愛と芸術と天才と』などがある。慶応義塾の旧塾歌「天に溢るゝ文明の……」の作詞者。

〔参考〕『慶応義塾出身名流列伝』(実業之世界社、明治42年)

加藤政之助(かとう まさのすけ)一八五四(安政1)年—一九四一(昭和16)年。埼玉県北足立郡、平民。

号、城陽。

明治8年11月、慶応義塾に入学し、11年まで在学。10年1月―4月期の「学業勤惰表」では「第五等ノ一」組の首席を占める、同じクラスに犬養毅がいた。11年1月から『民間雑誌』編集人、その後『大阪新報』『郵便報知新聞』記者。立憲改進黨系の埼玉県会議員。県会議長6期、衆議院議員当選連続12回。著書に、彼の憲法私案とも目される『日本政略』（明治13年）。訳書にキルワントマツクケープ著『西洋穴探』3冊（書名は福沢諭吉が命名。明治12―13年）、および英国13世紀のマグナカルタ発布当時の政治背景を纂訳した『英国回天綺談』2冊（前篇序文を藤田鳴鶴、尾崎行雄らが、後篇序文と跋文を矢野龍溪、森田思軒らが執筆。明治18年）等。

上条信次（かみじょう しんじ）一八四六（弘化3）年―

一九一二（明治45）？年。長野県東筑摩郡出身。

明治初年、開成所を卒業。松本師範学校で教師をした後、明治6、7年頃、再度上京、翻訳や著述に携わる。慶応義塾の入学は7年3月5日で、そのときの年齢は「二十七年四ヶ月」とある。これはちようど上条の翻訳開化『世夢物語』（オランダの「ジラスコリデス」の手になる未来小説）が出版された年のことで、英学の知識をさらに深め

るための入学であったか（上条はそれを英訳から重訳）。明治9年から『東京曙新聞』記者。その後『明治日報』『岡山新報』記者、『吉備日日新聞』社長。日清戦争終結後の29年頃、清国の駐日公使の知遇をえて三度ほど清国を訪問したが、晩年は零落して不遇のうちに生涯を終わらせた。

「参考」柳田泉「上条信次伝聞書」『明治初期翻訳文学の研究』

工藤精一（くどう せいいち）一八五五（安政2）年、武

蔵国生れ。

慶応4年7月、「十四才」で慶応義塾入学。卒業後、米国にわたり明治11年ラトガース大学卒業。元老院、開拓使に勤務ののち、明治31年から慶応義塾教員。著書に『須因大文典講義録』全7冊（開新堂、明治22―23年）等。訳書にフィリップ・ブイ・スミス『英国制度沿革史』（元老院蔵版、明治20年）。外国文学との関連では、大倉本澄著『ワシントンアービング スケッチブック注釈』全2冊（開新堂、明治26―27年）の校閲者として名をとどめる。肩書きは「米国大学校マストル、ラブ、アーツ」とある。

呉文聡（くれ あやとし）一八五一（嘉永4）年11月―

九一八（大正7）年9月。安芸浅野藩医師呉黄石の子。旧名頼士。

元治2（一八六五）年2月入学、「主人ノ姓名」の欄に「松平近江守」とある。のち大学南校を卒業し、東京統計協会を創設。内閣統計局審査官、慶応義塾、早稲田大学講師等。明治22年、雑誌『経済及統計』創刊。著書に『応用統計学』（富山房、明治21年）ほか多数。外国文学の翻訳としては、グリムの「狼と七匹の仔山羊」を翻訳した『八ツ山羊』（弘文社、明治20年）がある。これは、「西洋昔噺第一号」として出版されたもので、彩色の仕掛け絵本となっているところがすこぶる珍である。グリムの翻訳書としては同じ慶応義塾出身の菅了法の訳した『西洋古事神仙叢話』（集成社、明治20年）に次いで旧く、慶応義塾出身者の西洋児童文学との深いつながりを実証する上で欠かすことのできない文献の一つとなっている。

黒岩周六（くろいわ しゅうろく）一八六二（文久2）年

9月—一九二〇（大正9）年一〇月。高知県土佐国安芸郡出身。号、涙香、別名は大。

明治10年、大阪英語学校に学び、14年9月、慶応義塾入学。14年9月から12月までの「学業勤惰表」によれば、「科外」「甲組」の筆頭に「黒岩周六」の名前があり、「読

方大試業割合」が「九〇」と抜群の成績であったことがわかる（ちなみに二番の者の成績は「八一」。上京後、慶応義塾以外にも幾つか学校の門をくぐるが、「生来教科書に律せらるゝを厭ひて一も卒業するに至ら」なかつた（慶応義塾出身名流列伝）。明治15年『同盟改進黨新聞』の創刊に関与、その後『絵入自由新聞』『都新聞』主筆。25年11月、『万朝報』を創刊。34年には、思想結社「理想団」を創り、理想主義的な立場から社会浄化を目指した。外国文学の紹介においては、探偵小説・怪奇小説の翻訳・翻案ものを得意とし、明治21年1月にヒュー・コンウェイの『暗い日々』を「法庭の美人」と銘打って『今日新聞』に発表して以来、フランスのエミール・ガボリオールやボアゴベイ、イギリスのメアリー・ブラッドソンの作品の翻案を『都新聞』や『万朝報』に連載。江戸川乱歩など本格的なミステリー作家が登場する以前の日本の文壇にあって、人々の怪奇趣味・探偵趣味を一手に引き受ける娯楽作家の巨匠の観を呈していた。なかでも、『鉄仮面』（ボアゴベイ）、『巖窟王』（デュマ）、『噫無情』（ユゴー）はとくに好評を博した。最後の『噫無情』は、有名な『レ・ミゼラブル』の翻訳（翻案）で、涙香は明治30年に夭折した同じ慶応義塾出身の森田思軒の遺志を継ぎ、35年にその翻訳を『万朝報』に連載する。その際に使用

した『レ・ミゼラブル』の底本は、森田思軒が日頃座右に置いていた手沢本であったという。日本の読書界は思軒、涙香という福沢門下の文学者の連携により明治・大正・昭和と読み継がれる不朽の名作を手にするようになった。慶応義塾出身者の近代文学に果たした影響も決して僅少ではなかったことの一つの証しといえよう。

小林澄兄（こばやし すみえ）一八八六（明治19）年6月

生れ。長野県上伊那郡出身。筆名、乳木生。

明治34年5月、普通科入学、43年、文学科卒業。普通部教員、幼稚舎主任、普通部主任、大学予科主任を経て、昭和13年4月から21年2月まで文学部長。のち大学名誉教授。明治期の外国文学との関連では、『慶応義塾学報』や『三田文学』に掲載したツルゲーネフの散文詩の翻訳やトルストイ論などがある。

〔参考〕丸山信編著『福沢諭吉とその門下書誌』

小林雄七郎（こばやし ゆうしちろう）一八四五（弘化2）

年12月—一八九一（明治24）年4月。旧越後長岡藩士。

河合継之助の推挙で江戸に出て諸校に学んだのち、明治3年5月、「二十六歳」で慶応義塾に入学。卒業後、文部

省、大蔵省、工部寮等に出仕。明治21年創刊の『東北日報』主筆。明治23年、第一回総選挙に当選するが、翌24年47歳にて逝去。著書に政治小説『自由鏡』2冊（金港堂、明治21年—22年）や『薩長土肥』（博文館、明治22年）、訳書に『百科全書 法律沿革事体』（文部省、明治9年）等がある。外国文学との関連では、明治10年に文部省から出版された『^{馬爾加}日耳曼国史』が注目される。これは一八六九年にロンドンで発行されたミセス・マルカムの『ドイツ史』を翻訳したもので、下巻の巻末に「日耳曼ノ文学ノ事」が付録として加えてある。わずか十数頁の文章ではあるが、レッティング、ゲーテ、シラーなど主要文学者の業績や作品評価の概説、さらにはドイツ文学が外国文学から受けた影響などにも言説がおよび、近世ドイツ文学の歴史の流れを一通り概観できるものとなっている。慶応義塾出身者の著作には、この小林のドイツ文学史をはじめとして、洪江保の『英国文学史』（博文館、明治24年）、同じく『独仏文学史』（同、明治25年）、石川黍山の「米国学史」（『庚寅新誌』所載、明治24—25年）等、西洋文学の歴史を紹介したものが多し（明治20年代までの欧米各国の文学史の紹介はほとんどすべて慶応義塾の関係者によるものであった）。この方面においても慶応義塾の担った役割の再評価がなされてしかるべきところである。

「参考」柳田泉「小林雄七郎研究」『政治小説研究』下巻
(春秋社、一九六八年)

齋藤恒太郎* (さいとう つねたろう?) 一八五七(安政

4)年7月生れ。三重県出身。

明治11年慶応義塾入学。「証人」は同じ三重県出身の近藤真琴(ジブスコリデス著『新未来記』「明治11年」の翻訳者)。

この齋藤が、明治23年刊行の『マコー 克来貌伝注釈』(共益商社)の翻訳者・齋藤恒太郎と同一人物かどうかは定かでないが、同書の奥付に「三重県平民」とあること、さらには住所が「芝新銭坐十一番地」とあり、「証人」の近藤真琴の住所の「芝新銭坐六番地」と近いことなどから、恐らくは同一人であったと考えられる。齋藤の詳しい経歴や没年に関しては不詳。

洪江保 (しぶえ たもつ) 一八五七(安政4)年7月―

九三〇(昭和5)年4月。東京府出身、士族。森鷗外の史伝に登場する洪江抽斎の七男。号、羽化、幸福散史等。

明治8年高等師範学校卒業。浜松県立師範学校の教頭を勤めた後、明治12年11月、慶応義塾入学。入学時の年齢は「当廿六年」とある。13年12月本科を卒業し、愛知中

学校長、攻玉社教員、『静岡暁鐘新報』主筆等を歴任。明治22年から博文館の編集員として、歴史、哲学、憲法、地理、文学、数学と幅広い分野にわたる著作を発表する。

好奇心旺盛な人物が多かった明治期の著述家のなかでも、取り分け多方面に関心を寄せる作家として知られる。内田魯庵はその多才ぶりを『文学者となる法』という風刺本の中で、ゲーテやミルトンの学識も「幸福先生が宏博なる大々智識を以て比ぶれば是等皆云ふに足らず」と皮肉っている。手がけた作品の数も多く、明治38年に博文館を退社すると、ライヴアルと目される出版社の大学館から、判っているだけでも53冊にも及ぶSF、冒険小説を出版した(横田順彌「洪江保」『20世紀ニッポン 異能・偉オ一〇〇人』「朝日新聞社、一九九三年」)。明治38年以降の数年間で53冊ということだから、彼の著作をすべて合わせると優に百点を上回る。著述のほか、一時は株に手を染めて失敗したということからもわかるように、何ごとにも気の多い人物だった。それだけに取り扱う外国文学の幅の広さにかけても他の文学者の追隨を許さないものがある。彼の外国文学移入史上の功績は、たとえば、英・米、仏・独、ギリシャ・ローマ等、西洋各国の文学史の紹介に力を尽くしたこと、グリムの作品など西洋童話の輸入に先鞭をつけたこと、あるいはゴルドスミス

やステイヴンソンといった重要な作家の翻訳や翻案を
発表したこと等々、けつして少なくない。これに他の分
野の功績（たとえばヘーゲルの『歴史哲学』の紹介）や、
SF、怪奇小説における先駆的役割などを加えると、間
違ひなくわが国の文化史上特筆に値する人物ということ
になる。参考までに、外国文学に関連する書物のうち重
要と思われる著・訳書を以下に掲げておく。マコーレー
『弥爾頓論注釈』（共益商社、明治23年）、グリムほか『西
洋妖怪奇談』（博文館、明治24年）、『希臘羅馬文学史』（同、
明治24年）、『英国文学史』（同、明治24年）、『独仏文学史』
（同、明治25年）、『泰西婦女亀鑑』（同、明治25年）、ゴ
ルドスミス^{支那哲学者}『欧州巡遊通信』（同、明治26年）、ステイ
ーヴンソン（翻案）^{冒険小説}『百難旅行』（大学館、明治38年）。

島尾岩太郎（しまお いわたろう）一八六八（明治1）年

5月生れ。徳島県阿波国三好郡出身。

明治20年10月入学。「証人」は同じ徳島県三好郡出身で慶
応義塾の先輩・内田弥八。島尾については、内田弥八と
共著・共訳の『世界英傑伝』（内田弥八、明治20年）と『政治
小人国発見録』（松下軍治、明治21年）の二書の訳者という
ことが知られるのみで、その他の業績や経歴については
不明。上に掲げた作品は、両作ともに島尾の慶応義塾在

学中ないしはその直後の翻訳書。後者の『政治小人国発
見録』は、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』中「小人
国」の話を訳したもので、内題には内田との共訳とある
が、奥付には島尾一人の名前が「著作者」として掲げら
れている。島尾が中心になって訳したものを、内田が補
足し出版したものか。そこにある島尾の住所は内田の
（「証人」欄にある）住所と同じ「麻布区芝森元町二丁目
十一番地」に「寄留」となっている。なおこの島尾に関
しては、本書の内題に「島尾岩太郎」と誤記されている
（奥付は「島尾」ところから、しばしば「島尾」と誤つ
て伝えられてきた（柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』等）。
以後、「島尾」に訂正・統一していく必要がある。

菅学応（すが がくおう）一八六八（明治1）年8月—1

九三二（昭和7）年9月。讃岐国三野郡出身。号、

緑蔭。

明治22年1月、入学。24年12月、正科卒業、27年12月、
大学部文学科卒業。普通部、大学部教員。初期の『反省
会雑誌』や『慶応義塾学報』に寄稿。翻訳書に、ルソー
の『エミール』を訳した『児童教育論』（明治30年。のち
『父母と子供』と改題）などがある。

菅了法（すが りょうほう）一八五七（安政4）年2月—

一九三六（昭和11）年7月。島根県石見国出身。号、

桐南居士。

明治10年6月、「大人科」に年齢二十三年三月月で入学。

12年5月—7月の「学業勤惰表」には「科外 丙組」に名前がある。明治14年に『交詢雑誌』編集人を勤めたのち、京都本願寺に学び、その後オックスフォードで哲学を学ぶ。明治23年第一回総選挙において衆議院議員に当選。同年、『東洋新報』を創刊。のち、鹿児島に本願寺別院を建立し、その住職となる。晩年は、築地本願寺別当。

著書に、『哲学論綱』（集成社、明治20年）、『倫理要論』（金港堂、明治21年）等。外国文学との関係で注目されるのは、

本邦初のグリム童話の翻訳書となった『西洋古事 神仙叢話』

（集成社、明治20年4月）。グリム童話の翻訳書は、その後

呉文聡の『八ツ山羊』（20年9月）、上田万年の『おほか

み』（22年10月）、洪江保の『西洋妖怪奇談』（24年8月）、

井上寛一の『西洋仙郷奇談』（29年5月）と続くが、四書

のうち上田訳を除く三書までが慶応義塾関係者の翻訳であったことは注目されてよい。福沢諭吉の『童蒙をしへ

草』（明治5年）、福沢英之助の『訓蒙話草』（明治6年）以

来の、インソップ物語その他の西洋童話紹介の流れが、呉や菅らによってグリム童話という形で引き継がれること

になったと見るべきか。いずれにしても、これも慶応義塾出身者の近代文学への貢献の一つとして見逃せない事柄である。なお『西洋古事 神仙叢話』について一言つけ加えるならば、同書には「シンデレラの奇縁」を含むグリム童話十篇が訳載され、表紙に描かれた美しい天使の着色石版画とともに注目を惹いた。その出版に当たったのは、やはり慶応義塾出身の赤坂亀次郎率いる集成社。このように初期の翻訳文学関係の出版社には、丸善以外にも慶応義塾に関係するものがいくつあったが、集成社はその中でも最も重要な出版社の一つとして注目される。

鈴木常松*（すずき つねまつ）一八六六（慶応2）年4

月生れ。秋田県出身、平民。

明治15年3月入学。この鈴木常松が、明治25年5月に大

阪の積善館から『新訳 伊蘇普物語』を刊行した鈴木常松

（号・青溪）と同一人物かどうか、要確認。

関藤成緒（せきふじ なりお）一八四五（弘化2）？年生

れ。備後福山出身。旧姓大友平五郎。

明治2年入学。慶応義塾を卒業後、大阪開成所、新潟師範学校の教員を経て、16年秋田県師範学校校長。訳書に『百科全書 英国史』など文部省から刊行された百科全書シ

リーズが五篇と『弗氏万国史要』12冊（久栄堂、明治18年）等。師範学校の教師をしていた関係で、明治期に英語教科書として流行したT・B・マコーレーの『クライヴ』の注釈書も手がけている（『クライブ伝詳解』鴻盟社、明治21年）。同書の奥付には「広島県土族 関藤成緒」とある。「参考」福鎌達夫『明治初期百科全書の研究』（一九六八年）

高橋光威（たかはし みつたけ）一八六七（慶応3）年12月

—一九三二（昭和7）年4月『入社帳』には誕生の月は10月とある。新潟県北蒲原郡出身。号、雄峯。

明治18年10月入学、22年4月別科卒業。23年1月大学部入学、26年大学部法律科卒業。28年『福岡日日新聞』主筆を経て、31年から翌年5月まで英米に遊学。41年から衆議院議員当選連続8回、原内閣の内閣書記官長を勤めた。訳書にカーネギー著『最近五十年間米國繁昌記』2冊（博文館、明治24年）、ポルトン著『貧兒立身伝』（ジョンソン）「ゴールドスミス」を含む、新進堂、明治25年）等。翻訳文学との関連で注目されるのは、明治27年に博文館の「世界文庫」の11、12、13編として出版された『ロビンソン 絶島漂流記』全3冊。これは同年5月一冊にまとめられ新しい装丁のもとに出版されたが、38年には7版を数え

るほど広く普及した。明治期の『ロビンソン・クルーソー』の翻訳として一般に行われたのは、井上勤の『魯敏孫漂流記』（博聞社、明治16年）と牛山鶴堂の『新 魯敏孫漂流記』（春陽堂、明治20年）とこの『絶島漂流記』の3作であるが、明治30年以降は高橋の訳した『ロビンソン・クルーソー』が最も広く愛読された。西洋文学の翻訳者と代議士当選連続8回の政治家という取合わせは、今日の目からするとあまり入れあわせぬもののように思われるが、それがごく普通に結び付いていたところに当時の知識人の幅の広さがうかがえる。

高橋基一（たかはし きいち）一八五〇（嘉永3）年—一

八九七（明治30）年6月。島根県松江出身、士族。

号、愛山。

明治4年7月入学、当時の年齢は「二十二歳」。『日新真事誌』『朝野新聞』記者を経て、17年『自由新聞』に入社。のち『江湖新聞』『東京新聞』の記者。明治14年以来、一貫して自由党員の立場から筆を執った。訳書に『英 国会沿革史』3冊（朝野新聞、明治12年）、著書に未来小説『世後 浮世態』（高橋基一著兼出版、明治20年）。外国文学との関連では、自由党員の高橋に相応しく、ヴィクトル・ユゴーの伝記の翻訳『彪 愛国偉勳』（東崖堂、明治20年）があ

る。本書の表紙に「VICTOR HUGO AND HIS TIME」とあるところから、そうした標題の英語の原書に拠ったらしい。

高橋義雄（たかはし よしお）一八六二（文久2）年2月

—一九三七（昭和12）年12月。茨城県東茨城郡出身、士族。号、箒庵ほか。

明治14年9月、同郷の渡辺治、石川幹明らとともに慶応義塾に入学。15年7月、渡辺と同時に「正則」卒業。『時事新報』記者、三井銀行、三越、王子製紙役員。茶人としても一家をなす。著書に、福沢諭吉の序文を付した『日本人種改良論』（石川半次郎刊、明治17年）ほか。西洋文学との関係では、当時イギリスで上演された脚本四種を集めて翻訳した『梨園の曙 一名西洋演劇脚本』（金港堂、明治20年）がある。詳細は「洋琴調子整」（ヘンリー・イー・ジョーンズ作）、「恋衣乾ぬ間の渚」（ジョージ・マクファア作）、「ガイフォークス地雷火奇譚」（ジョージ・マクファア作）、「女権拡張情 理 岐」（ティー・イー・ハーマー作）の四作。いずれもイギリスの劇作家の手になるものであるが、今日ではほとんど忘れられた作品となっている。

竹越与三郎（たけごし よさぶろう）一八六五（慶応1）

年10月—一九五〇（昭和25）年1月。新潟県中頸城

郡出身。旧姓清野。号、三又。

明治14年9月、入学。16年、時事新報社に入社。以後『大阪公論』『国民新聞』ほかの記者。29年、『世界之日本』創刊。35年以降、衆議院議員当選連続5回。39年、『読売新聞』主筆。大正11年、貴族院勅選議員、その後枢密顧問官等歴任。著書に、『格朗究』（民友社、明治23年）、『二千五百年史』（開拓社、明治29年）、『日本経済史』8巻（大正4—8年）ほか多数。西洋文学関連では、民友社の「拾貳文豪」シリーズの一篇として刊行された『マコーレー』（明治26年）が知られる。

戸川安宅（とがわ やすいえ）一八五五（安政2）年10月

—一九二四（大正13）年12月。東京府、士族。播磨守安清の孫。号、残花。

明治6年2月、「十六歳四ヶ月」で入学。ほかに大学南校、築地学校等に学ぶ。キリスト教の伝道に従事する一方、『女学雑誌』や『日本評論』などキリスト教系の雑誌に寄稿。26年、志賀重昂、松村介石らと雑誌『三籟』を創刊、その2号から4号に「詩伯ゴールドスミス」を連載した。著書に、『水師 ネルソン伝』（福音社、明治27年）、『世界三大宗教』（博文館、明治28年）等。日本女子大の講師も勤めた。

西河通徹(にしかわ みちあき)一八五六(安政3)年11月

— 一九二九(昭和4)年9月。愛媛県宇和島の出身、

士族。号、鬼城。

藩覺明倫館などに学んだ後、明治7年3月、大阪慶応義塾入学。8年2月東京の同塾に移り、8年8月「三等」在籍。自由民権主義を唱え、9年に『朝野新聞』に寄せた文章がもとで投獄される。その後、松山『海南新聞』『信濃日報』などを経て、15年『自由新聞』記者。そこで馬場辰猪の国友会の演説を筆記して社説にしたこともある。その後『絵入朝野新聞』『大阪公論』東京・大阪の『朝日新聞』等に勤務。その間の事情は『鬼城自叙伝』(昭和6年)に詳しい。外国文学との関連では、『露国虚無党事情』(競争堂、明治15年)が知られる。これは「露国虚無党事情数編ヲ蒐集シテ一冊子ト為」したものの。標題には「西河通徹訳述」とある。当時ロシアの「虚無党」を題材にした作品がやはり明治15年だけでもこれ以外に川島忠之助訳『虚無党退治奇談』(ポール・ヴェルニエ原著、川島忠之助出版)、宮崎夢柳著『虚無党 冤枉乃鞭答』(駿々堂)の二書がでた。なお、西河の名前「通徹」の読み方は明治7年の慶応義塾の『入社帳』に付されているルビによった。宮武・西田『明治新聞雑誌関係者略伝』では

「つうてつ」となっている。

仁田桂次郎(にった けいじろう)一八五八(安政5)年

— 一八九一(明治24)年2月。伊豆国田方郡仁田村

出身、農業を営んでいた仁田大八郎三男。号、叢菊

野史ほか。

小田原英学校等に学んだ後、明治7年11月、年齢「十六年六月」で慶応義塾入学。8年8月「二等」在籍、9年1月「一等」で「語音修業ノ為」「退校」。ほかに横浜居留の米人の学校や商業学校で学ぶ。10年1月肺結核に罹り、帰郷。病を養いながら、読書と著述の生活を送る。のち結婚し、二子をもうける。交わりを結んだ知友に、中村正直、福沢諭吉、矢野文雄、尾崎行雄等。著・訳書として、『肺労治論』(丸家善七、明治14年)、『洋学軌範』(丸家善七、17年)、『英語会話和訳』初編(丸家善七、19年)、『人類成来論綱』(中近堂、20年)などがある。仁田桂次郎の業績で忘れることができないのは、チャールズ・ラムの『シェイクスピア物語』の作品5篇を「泰西奇談」として翻訳・刊行したこと。明細は『泰西奇談 冬物語 因果物語』仁田桂次郎訳・出版、明治19年)、『泰西奇談 女房持虎の巻』(同、21年)、『泰西奇談 嵐之巻』(同、21年)、『泰西奇談 智孟物語』(西原喜一発行、21年)の5篇4冊。

原作名はそれぞれ順に、「冬物語」「尺には尺」「じゃじや馬馴し」「テンペスト」「アゼンスのタイモン」。『嵐之巻』の「広告」に「泰西奇談八篇ヲ逐テ出版シ二拾篇ニ及デ全尾トナルベシ」とあり、ラムの『シェイクスピア物語』全篇の翻訳を企図していたことがうかがえるが、病状が思わしくなかったのか、この5篇だけで終わる。いずれにしても、慶応義塾の出身者とシェイクスピアの作品（ラムの作品を含む）の浅からぬつながりを実証する上で欠かすことのできない文献の一つである。

〔参考〕柳田泉「叢菊野史（仁田桂次郎）伝」『明治初期翻訳文学の研究』、仁田健二「父 叢菊野史の一生」『書物展望』4年8号（昭和9年8月）

野口米次郎（のぐち よねじろう）一八七五（明治8）年

7月—一九四七（昭和22）年7月。愛知県海東郡津島出身。名前は米次。

明治24年1月入学、25年4月—7月の「勤惰表」には「本科五等ノ一」に名前が見える。26年渡米、ウォーキン・ミラーの知遇を得る。35年にイギリスに渡り、そこで*From the Eastern Sea*を出版、英米の詩壇に認められる。

37年に帰国した後、「あやめ会」を結成、『あやめ草』（如山堂、明治39年）、『豊旗雲』（左久良書房、39年）を出版する。以後、慶応義塾文学部教授を勤めるかたわら、オッ

クスフォード大学や中国、インドなどで日本の詩歌などについて講演。著書には欧米の詩や詩人に関するものが少なくないが、その一例を挙げると、「余が英文界に於ける初陣」「詩仙ミラーとの情話」などを収めた『英米の十三年』（春陽堂、明治38年）がある。『あやめ草』や『豊旗雲』の中にも、ミラーやW・B・イエーツをはじめとする内外の詩人の作品が多数掲載されている。その他、英語・日本語で書かれた詩や評論多数。

野田良吉*（のだ りょうきち）一八六八（明治1）年7

月生れ。山口県徳山出身。

明治21年11月入学。これが明治34年に発行された『奇談幽霊塔』3冊（米ウイリアムソン著、黒岩涙香関）の翻訳者と同一人物か、要確認。

橋本武（はしもと たけし）一八五八（安政5）年8月生れ。東京府士族。号、東洋逸史。

明治17年1月入学。明治20年11月に『うきよかがみ』巻之一を翻訳・出版。本書は和装木版の25丁の小冊で、原作は「摩爾利亜登」。そこにある翻訳者の住所が表記の橋本の慶応義塾入学の際の住所と一致したことから同一人であることが判明。橋本に関するその他詳しいことは不

明。

福井有（ふくい ゆう？）一八五八（安政5）？年生れ。

三重県伊勢国出身、士族。

明治7年、東京外国語学校「英語学下等第二級」に在籍（同級に橋槐二郎、福富孝季ら）。明治9年3月、年齢「十八年」で慶応義塾入学。明治前半に流行した英語教科書『ラセラス』（サミュエル・ジョンソン著）の翻訳・『羅世良斯』巻上（豊住謹次郎刊、明治23年）がある。「福井有直訳」とあり、訳者の住所が「三重県伊勢国津市」となっていることから、郷里に帰って教師をしていたものか。その他の著作や経歴に関しては不明。

福沢英之助（ふくざわ えいのすけ）一九〇〇（明治33）

年1月没。中津藩、士族。和田慎二郎を改姓。

文久3年初夏入学、のち卒業。慶応2年、幕府派遣の留学生として渡英。その際、和田姓を改めて福沢諭吉の弟として留学。のち、貿易商、第一銀行役員。著書に、『童児論』2冊（慶応義塾出版社、明治6年）、訳書に、『イソップ物語』を翻訳した『訓蒙話草』2冊（明治6年）等。後者は、福沢諭吉の『童蒙をしへ草』（『イソップ物語』をはじめとする西洋の児童向け物語の翻訳紹介。明治5年）の流れを継いだ本格的な『イソップ物語』の紹介で、これが

のちに菅了法や呉文聡、渋江保ら慶応出身者によるグリム童話の翻訳・紹介へと発展していく。

藤田茂吉（ふじた もきち）一八五二（嘉永5）年6月—

一八九二（明治25）年8月。豊後佐伯県出身。旧姓、

林。号、鳴鶴、翠嵐生ほか。

佐伯藩の楠文蔚に漢籍を学んだのち、明治4年11月、同郷の矢野文雄の勧めで慶応義塾入学。入学時の年齢は、「十九年」。7年12月「正則」卒業。8年『郵便報知新聞』に入り、主筆。自由民権を主張し、『東京日日新聞』の福地源一郎と論戦を交わす。14年東京府議員、23年衆議院議員。著書に『文明東漸史』（報知社、明治17年）、『済民偉業録』前篇（集成社、明治20年）。訳書にブルワー・リットン著『^{諷世}嘲俗 繫思談』初篇・中篇（尾崎庸夫と共訳。実際は朝比奈知泉の訳といわれる。明治18・21年）。藤田は、初期の翻訳文壇で最も重要なラムの『シェイクスピア物語』の紹介者の一人で、明治16年2月から18年7月にかけて『郵便報知新聞』に同物語中の8話を紹介する。明細を記すと、「冬物語」（16年3月）「お気に召すまま」（同4—5月）「ヴェロナの二紳士」（同5月）「ハムレット」（同6月）「シンベリン」（17年12月）「ロミオとジュリエット」（18年4月）「マクベス」（同7月）「終わりよければ

すべてよし」(同7―8月)の8篇。最初の4篇には「春宵夜話」(のち「春宵閑話」)の統一題がある。この内の「お気に召すまま」は16年7月に翠嵐先生訳述『仏国某州領主麻吉侯情話』(春夢楼印行)として刊行、これが本邦初の『シェイクスピア物語』の翻訳書となった。同書には「西基斯比耶叢書 No.1」の文字があり、続巻が企図されていたとも思われるがこの一冊で終わった。翠嵐先生が藤田茂吉であることは、柳田泉『春宵夜話』について『明治初期翻訳文学の研究』に詳しい。

本多孫四郎(ほんだ まごしろう)一八五七(安政4)？
年生れ。肥前島原県出身、士族。

明治4年9月、年齢「十五才」で入学。明治17年8月『時事新報』の「清仏事件」に関する特派員。訳書に、『商法五十課』(集成社、明治20)、文学関係では、英国人N・フオーセット著『鮮血日本刀』2冊(金港堂、明治20年)がある。「クライム、ラブ、クリスマスイブ」という原書を訳したもので、初期「探偵小説」の一篇。

益田克徳(ますだ かつのり)一八五二(嘉永5)年1月
―一九〇三(明治36)年4月。佐渡相川の出身。旧名、莊作。実業家にして美術品収集家・益田孝(鈍

翁)の実弟。

明治2年12月、「十八歳」で入学。高松藩英学教師を経て、駅通寮に出仕。10年、司法七事判事、18年、東京府会議員。その後、東京海上保険、明治生命、王子製紙、鐘紡等の役員を歴任。訳書に、米S・グリーンリーフ著『証拠論抜粹』(司法省蔵版、明治10年)。翻訳文学関係では、英国ブルワー・リットンの「ナイト・アンド・モーンング」を訳した『夜と朝』12冊(速記法研究会、明治22―23年)が知られる。これは益田が口訳したものを「速記法研究会」の主宰者・若林■蔵が筆記したもので、文章は純然たる言文一致の口語文。それがいかにこなれた訳文であったかは、本篇が「猫遊軒伯知子」という講釈師により「夜と朝の講談」として、府下各所の寄席で公演された事実からもうかがえる(第10巻の広告)。明治翻訳文壇の泰斗・森田思軒は、その序文のなかでこの作品の出現を「我国文学世界ニ一変ヲ生ズルノ朕兆まへざし」と受けとめる。後世の研究者の多くも、思軒のこの解釈に倣って、本篇を日本の翻訳文学の発達史上二期を画す重要な作品と位置づけている。いずれにしても、明治の文学史・文章史の上で、二葉亭四迷の「あひびき」とならんで、注目される作品の一つ。柳田泉によれば、この作品の文学史上の位置づけには大きく考えて三つあるという。す

なわち、第一に、全篇言文一致の点で「あひびき」のあとを受ける。第二に、速記を用いた点で明治19年の渡辺治の『政海之情波』に続く。第三に、翻訳の態度において涙香小史流である、と。いうまでもなく、後者二人は慶応義塾の出身で、日本の近代文学に一大転機をもたらす翻訳文学の出現の背後に、慶応義塾の存在があったことは明白である。

松居真玄（まつい まさはる）一八七〇（明治3）年2月

—一九三三（昭和8）年7月。宮城県仙台出身。号、

松葉、のち松翁。

明治22年12月、国民英学会「本科」卒業（第一回卒業生）。23年1月、慶応義塾入学。24年『早稲田文学』の編集に従事、ついで『郵便報知新聞』『万朝報』記者。後者二紙への就職は森田思軒の斡旋による（森田章三郎『思軒森田文蔵小伝』。明治27年「昇旭朝鮮太平記」を発表。以来、数多くの戯曲を執筆する。その一方で、演出においても手腕を発揮し、晩年は松竹の文芸顧問も勤めた。著書に『劇団今昔』（大正15年）ほか。翻訳文学の分野においても幾つかの貴重な作品を残した。そのうち明治期のものを挙げると、セルバンテス『鈍機翁冒険譚』2冊（博文館、明治26年）、モリエール『当世女学者』（右文社、27年）、

デュマ『玄雪姫』2冊（青木嵩山堂、36年）、ル・キユー『虚無党奇談』（警醒社、37年）など。最初の『鈍機翁冒険譚』は、本邦初の『ドン・キホーテ』の単行書となった（坂東省次・蔵本邦夫編『セルバンテスの世界』『世界思想社、一九九七年』）。

松島剛（まつしま こう）一八五四（安政1）年10月—

九四〇（昭和15年）1月。和歌山県士族。

明治9年1月、年齢「二十一年一月」で入学（「四等ノ一」）。水戸中学校教頭、埼玉県不動岡中学校校長、東京英和学校教授等歴任。明治期前半の翻訳者として名前が高く、手がけた作品は、H・スペンサーの『社会平権論』6冊（大野堯運刊、明治14—16年）、J・S・ミル『弥兒教育論』（水戸柳旦堂、明治18年）ほか多数。31年、雑誌『学窓余談』創刊。その際、学窓余談社を興して、『英語科初等講義録』『英語科中等講義録』を発行した。外国文学の移入史上見逃せない文献に、W・スウィントン著『万国史要』（春陽堂、明治19年）があり、その「第五篇」には、シェイクスピア、ゲーテ、ワーズワス、ディケンズ等、一六世紀から一九世紀にかけての「著作家」数十名の略伝が掲げられている（川戸道昭『明治期外国人名辞典』別冊解説「大空社、一九九六年」）。松島の関係した翻訳には、この他、

松島剛監修・学窓余談社訳『審問美談 ろびんそんくるそう』

(春陽堂、明治44年)がある。

宮森麻太郎 (みやもり あさたろう) 一八六九(明治2)

年1月—一九五二(昭和27)年9月。広島県豊田郡

出身。号、桃潭。

明治20年1月入学、22年4月別科卒業。明治27年、教員
検定試験合格。宮崎中学、宇都宮中学、水戸中学、京都
中学教員。慶応義塾、早稲田大学、東洋大学等講師。日
本文の英訳で知られ、英文『福沢諭吉伝』(丸善、一九〇
二年)、『英和对訳学生日記 花光月影』(鍾美堂、一九〇六
年)などがある。外国文学を紹介したものとしては、宮
森桃潭・小林潜龍訳注『英米百家詩選』(三省堂、明治41年)
があり、ブレイク、バーンズ、ワーズワス、シェリー、
ロングフェローなどの詩の原文と訳注を百篇ほど収録し
ている。

森田文蔵 (もりた ぶんぞう) 一八六一(文久1)年7月

—一八九七(明治30)年11月。岡山県備中国笠岡村

出身。号、思軒ほか。

文久1年、岡山県笠岡村の商家に生まれる。森田家は、
商家ながら学問に縁の深い家で、祖父は頼山陽とも交

流があった。明治7年5月、矢野光儀(文雄の父)のつ
てを頼って大阪慶応義塾に入学(年齢は「拾二年十月」)
。明治8年7月、大阪慶応義塾の移転に伴い徳島慶応義塾

に移籍。明治9年4月、校長矢野文雄の帰京とともに東
京慶応義塾に転校(「証人」は矢野)。実態のあまり知ら
れていない大阪慶応義塾、徳島慶応義塾の教育を体験し
た数少ない証人の一人。明治10年慶応義塾を退学し、帰
郷。地元の興譲館にて3年ほど漢籍を学んだのち、明治15
年10月、再び上京し、矢野の斡旋で『郵便報知新聞』記
者となる。18年3月から6月にかけて中国を訪問、続け
て11月からはヨーロッパ諸国を歴訪。帰国後は『郵便報
知新聞』の編集を任せられ、明治25年に退社するまで、同
紙編集の実権を握った。その間に、ジュール・ヴェルヌ
やヴィクトル・ユゴーをはじめとする数多くの西洋文学
の翻訳を手がけ、『郵便報知新聞』や徳富蘇峰の『国民之
友』などに発表。やがてその名は全国に知られ、一部批
評家から「翻訳王」の名で迎えられた。東京下谷の根岸
に居を構え、回りに住んでいた饗庭篁村、須藤南翠、宮
崎三昧、幸田露伴、岡倉天心などと親交を結んだことか
ら、「根岸派」の一人に挙げられている。明治25年、矢野
とともに報知新聞社を退社した後は、『国会』『万朝報』
『少年世界』などの新聞・雑誌に作品を発表。なかでも、

29年に『少年世界』に連載した「十五少年」(ヴェルヌの『二年間の学校休暇』)は、のちに博文館から出版されて、明治・大正・昭和と多くの少年読者に読み継がれる一大ロングセラーとなった。社会派作家としての一面も備わり、ユゴーの「探偵ユーベル」や「死刑前の六時間」など死刑囚を扱った作品を取り上げ、日本の読書界にフランス人道主義の視点を提供した。一方、そうした人道主義に依拠する「社会の罪」という考えを世に示して、大津事件にゆれる当時の論壇に一石を投じた。晩年は頼山陽の評論などにも意を用いたが、明治30年11月腸チフスに罹り、36歳という若さで急逝。その後は、彼の頼った漢文に基礎を置く旧文体が廃れるにつれ、次第に世間から顧みられない存在となっていくた。しかしその作風と人柄を愛する友人・知己は多く、森鷗外や徳富蘇峰をはじめ数多くの文人が彼の思い出をつづる文章を残している。約10年間の執筆活動を通して世に送った単行書は、『鉄世界』『警使者』『十五少年』『無名氏』(以上ヴェルヌの翻訳)、『探偵ユーベル』『懐旧』(以上ユゴーの翻訳)、『間一髪』(E・A・ポー『陥罪と振子』)、『小説 列国変局史』、『頼山陽及其時代』等、10作あまりを数える。『参考』柳田泉「森田思軒伝記稿」『明治初期翻訳文学の研究』、森田章三郎『思軒森田文蔵小伝』(森田章三郎刊、

一九四〇年)、川戸道昭「森田思軒翻訳作品目録」『明治期翻訳文学書全集』IV(ナダ書房、一九九六年)。

矢野文雄(やの ふみお) 一八五〇(嘉永3)年12月—

九三一(昭和6)年6月。豊後佐伯藩出身、士族。

号、龍溪、天峯居士。

明治4年3月、「二十二歳」で入学。卒業後、明治5年、慶応義塾教員。8年1月、大阪慶応義塾校長、同年7月、徳島慶応義塾校長。大阪、徳島時代の生徒の一人に森田思軒がいた。10年、『郵便報知新聞』副主筆。11年、大蔵省出仕、14年10月、大隈重信の下野とともに同省免官。15年3月、立憲改進黨結成。のち清国特命全権公使(30年)、慶応義塾評議員、大阪毎日新聞相談役などを歴任。著書に、穏健な民主政治を唱えた『経国美談』2冊(報知新聞社、明治16—17年)、ヴェルヌの冒険小説の趣向を模した『浮城物語』(報知社、23年)、社会主義的なユートピアを描いた『新社会』(大日本図書、35年)等。翻訳文学との関連で忘れられないのは、明治19年に『郵便報知新聞』の刷新を企て、同紙に「嘉坡通信 報知叢談」という総題の文芸欄を創設し、西洋小説紹介の場としたことである。そこには彼自身の訳した「志別士商人の物語」(19年)をはじめ、森田思軒や小栗貞雄らによる翻訳小説が数多く掲

載され、日本人の西洋小説理解に一役買った。のちに翻訳文学者として名をなす原抱一庵などは、同欄に掲載されるヴェルヌの翻訳小説のあまりのおもしろさに札幌農学校を中退して、思軒の門下に加わったほどであった(抱一庵「吾の昔」)。矢野の「志別土商人の物語」は、その後『報知叢談 志別土商人物語』として成文堂より刊行された(明治20年)。

【参考】川戸道昭「森田思軒と矢野龍溪」『福沢手帳』95 (福沢論吉協会、一九九七年)

山田良作(やまだ りょうさく) 一八六〇(万延1)年10月

生れ。越中富山出身、平民。

明治12年10月入学、14年12月「本科 第三等」在籍。訳書に、明治前半に流行した英語教科書『ワールン・ヘイステインクス』(T・B・マコーレー著)の翻訳『印度顛覆史』上巻(山田良作出版、明治15年5月版權免許)がある。同書には小幡篤次郎の「序」が付され(「学友山田良作君」と言及)、その日付が17年2月となっているところから出版もそれ以降のことであったと思われる。いずれにしても明治期に最も行われた英語教科書の本邦初訳であったことに変わりはない。山田に関するその他の業績や経歴は不詳。

横山■呂久(よこやま むろひさ?) 一八六二(文久2年)

6月生れ。岐阜県大野郡出身、平民。

明治16年9月入学、18年12月「正科」卒業。サー・ウォルター・スコットの歴史談『祖父物語』を抄訳した『寿其徳奇談』(明治18年)で知られる。藤田鳴鶴、デニングらが序文を寄せている。出版人は同じ慶応義塾出身の内田弥八。横山のその他の業績等に関しては不詳。名前の読み方は「はんろく」の説もある(柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』)。

吉田薫六(よしだ きろく) 一八九一(明治24)年11月没。

徳島県名東郡出身、実家は農業兼藍商人。号、韜庵。

明治8年、徳島で小学課程を了え上京、慶応義塾に学ぶ。在学中尾崎行雄らと『東京曙新聞』に投書。塾監・講師の専任を嫌って塾中新聞を発行し、塾監から再三注意を受けるが従わず退学となる。11年、家業の藍商に従事するも長く続かず、徳島に赴き『普通新聞』を発行。その後16年、『郵便報知新聞』、『明治協会雑誌』の編集に当たる。19年欧米を旅行し、帰国後矢野文雄の『郵便報知新聞』を助ける。一時喧嘩別れをするがのち復帰。同窓の森田思軒とともにその才学を広く認められた。同じ慶応義塾出身の磯辺弥一郎は森田思軒の早逝に際して『中外

英字新聞研究録』に次のように記している。「故吉田熹六氏と森田氏とは同窓の友にして同じく報知社に於て矢野龍溪氏の幕下と為り、爾來此二人は形影相伴なふが如く、一は俗才を以て、一は学才を以て、*genius*の名ありし者、然るに吉田氏先づ夭折し、今又森田氏早世す。邦家のために惜しみて尚ほ余りあり。嗚呼、悲哉」と。吉田が慶応に学んだのは8年から11年頃までということだから、磯辺の言うとおり確かに思軒と同時期の学生であったはずだが、慶応義塾の『入社帳』には「吉田熹六」という名前は見当たらない。慶応退学後に養われていた「叔父」と「父子」の縁を切った（宮武・西田『明治新聞雑誌関係者略伝』）とあるから、恐らくは改名したものと思われる。そう思つて当時の『入社帳』や「学業勤惰表」を調べてみるところ「塩田喜六」なる人物が浮上してきた。入学は8年7月で「十三」歳、出身は「名東県津名郡」。思軒が「第一等」に在籍した10年4月当時、「童兒科第一番」に名前がある。同級生には矢野貞雄、井上寛一、福沢捨次郎らがいた。この塩田なる人物はその後ずっと矢野と一緒に進級を重ねていくが11年9月の「勤惰表」から忽然と姿を消す。入学と退学の時期が合うのと、同じ「名東県」出身ということから、これが後の吉田熹六の可能性も考えられる。いずれにせよ、この思軒と並ぶ矢

野門下の俊秀（磯辺の伝える通り新聞人として才能を発揮した）に、いっそうの関心を寄せてみる価値は十分ありそうだ。夭折したために著作はあまり多くないが、翻訳文学の分野で一つ、ブルワー・リットンの『カルデロソ・ザ・コーティヤー』を翻訳した『奸雄之末路』（集成社、明治21年）を残している。その序文において、盟友の思軒と同じ、言文一致に反対する立場を表明しているのも興味もたれる点である。

渡辺治（わたなべ おさむ）一八六四（元治一）年8月—

一八九三（明治26）年10月。茨城県東茨城郡出身。

旧水戸藩士。号、台水。

明治14年9月、同郷の高橋義雄、石河幹明らとともに入学。入学時のクラスは、渡辺と高橋が「本科第二等」、石河が「予科第二番」。幼少から頭脳優秀の誉れの高かった渡辺はいきなり最上級から一級下の「本科第二等」に配属されるが、それでも同期の成績が上位5番を占めるほどの秀才振りを発揮した。15年7月「正則」を卒業し、時事新報に入社。『都新聞』の創刊に携わったのち、22年5月『大阪毎日新聞』主筆。23年7月、衆議院議員当選。25年の総選挙に落選したのち、新聞人として力を尽くすが、26年10月、三十歳という若さで早逝。著訳書にH・

スペンサー原著『政法哲学』2冊（浜野定四郎と共訳、石川半次郎刊、明治17―18年）、『鉄血政略 ビスマルク伝』（金港堂、明治20年）等。翻訳文学の分野では、ビーコンズフィールド（三英デイズレイリー）著『双美政海の情波』4冊（渡辺治刊、明治19―20年）、シェイクスピア著『鏡花水月』（集成社、明治21年）が知られる。前者は『エンディミオン』という小説の訳で、この時代に流行した政治小説の一つ。注目されるのは、これが市東謙吉という速記者を使つての口訳筆記であつたことである。結果として一般読者にも大変分かりやすい平易な訳文の出現をみた。柳田泉によれば「この態度が今一進化すると益田克徳氏訳の『夜と朝』のそれとなり、一転して黒岩涙香流になる」（『明治初期翻訳文学の研究』）という。わが国の言文一致の脈流を辿る上で見逃しがたい作品の一つといえよう。その流れを創つたのが渡辺、益田、涙香といずれも慶応義塾の出身者であつたことは注目されてよい。彼らの飽くなき好奇心と創意工夫の才を示す一つの証左といえる。もう一方の『鏡花水月』のほうはシェイクスピアの『間違いの喜劇』を訳したもので、ラムの物語ではなくシェイクスピアの原書からの翻訳であつた点が注目される。しかも、その翻訳の体裁は「総て原本の儘を写し」た脚本仕立て。訳文も『政海の情波』以来の平易な口語体を受け

継ぐもの。柳田泉も「当時としては出色の成績」と賛辞を惜しまない。藤田鳴鶴、仁田桂次郎、渡辺治、板倉興太郎、磯辺弥一郎とつないだ慶応出身者によるシェイクスピア紹介の流れの中核に位置するばかりか、初期の翻訳文学全体の中でも最も重要な翻訳作品の一つとなつている。渡辺については、その夭折がなんとしても惜しまれる。

【参考文献】

本略伝を編むに当たつては以下の四書をとくに参照させていただいた。記して感謝の意を表する次第である。

- 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』（春秋社、一九六一年）
富田正文監修 丸山信編著『福沢諭吉とその門下書誌』（慶応通信、一九七〇年）
宮武外骨 西田長寿『明治新聞雑誌関係者略伝』（明治大正言論資料20）（みすず書房、一九八五年）
福澤研究センター編『慶応義塾入社帳』全5冊（慶応義塾、一九八六年）

その他利用させていただいた主な書物は次のとおり。

『慶応義塾出身名流列伝』（実業之世界社、一九〇八年）

村上浜吉監修『明治文学書目』（村上文庫、一九三七年）

豊田実『新訂 日本英学史の研究』（千城書房、一九六三年）

高梨健吉「英学者略伝」『日本の英学一〇〇年』別巻（研究社

出版、一九六九年）

榎原貴教編『明治期翻訳文学書全集 目録』全4冊（ナダ書房、

一九八七—一九六六年）

『コンサイス 日本人名事典 改定新版』（三省堂、一九九三年）

『三橋文庫目録』（東京経済大学、一九九〇年）

川戸・榎原編『磯辺弥一郎と「中外英字新聞」』（ナダ書房、一

九九五年）

これ以外に慶応義塾の「学業勤惰表」（成績表）や東京外国語学校の「生徒名簿」などを参照したが、とくに慶応義塾の初期の「学業勤惰表」を参照するに当たっては、慶應義塾福澤研究センター所長の坂井達朗教授ならびに研究員の西澤直子氏のご協力とご助言を賜った。また、本稿を準備する段階において、社団法人福澤論吉協会理事・竹田行之氏から貴重なアドヴァイスをいただいた。心より感謝申し上げる次第である。